

千葉県
指定史跡

北総の5世紀に新たな1ページ—八代玉作遺跡

古代の豪族が好んで身につけた管玉や勾玉などの首飾りは、市内の古墳からよく出土します。しかしこれがいったいどこで作られたものなのか大きな謎でした。

昭和37年八代花内遺跡(昔の遺跡名)で、東日本初めての玉作遺跡の発掘調査が行われ、玉の製作を職業とした人々の家や仕事場の跡(工房跡)が発見されました。5世紀前半ころの土器とともに、作りかけの管玉や勾玉、それを作る道具などが大量に出土しました。

古代の書物に見られる「たまつくり」に関する記事を見てみると、日本最初の百科事典といわれる『和妙類聚抄』の中に、下総国埴生郡玉作郷という記載があります。これは市内のどこかに玉作という地名があったことを示す史料です。

玉作郷は、現在の八代・松崎・大竹・玉造地区周辺と考えられ、その後、松崎外小代遺跡・大竹玉作遺跡などで同様の遺跡が相次いで調査され、印旛沼の東側一帯に大規模な玉類の製作地があったことが分かりました。

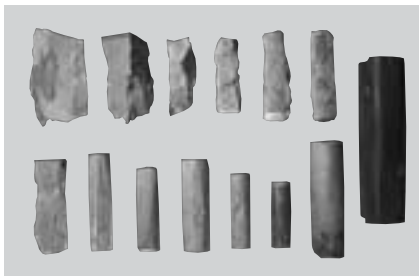
八代玉作遺跡は、考古学が古代の文献と現在の地名を結びつけた数少ない遺跡で、北総の古代史上に新たな1ページを開く画期的な発見となりました。

昭和46年成田ニュータウンに、この遺跡の発見にちなんで『玉造』という地名が誕生しました。



遺跡発見のきっかけは、10数片の小さな緑色の石のかけら。調査中は各地から大勢の見学者が訪れました。

(北沢広氏提供)



小指大の大きさに割って、少しずつ形を整えてでき上がる管玉



竪穴式住居跡の中では、形作り・みがき・穴あけなどの作業が行われました。(島根県玉湯町出雲玉作資料館提供)

編集後記

本号から市内の文化財などを紹介する「成田歴史玉手箱」を最終ページ(毎月15日号に連載予定)に設けました。成田の歴史は非常に古く、成田空港の建設により発見された三里塚遺跡から出土した旧石器時代の磨製石斧は、今から約3万年前に使われたもので、房総最古級の貴重な遺物として注目

されているそうです。市内には、この長い歴史を背景に数多くの文化財があります。連載をスタートするにあたり関係する書物を開いてみて、「歴史と伝統のまち成田」を改めて感じました。ふるさと成田を再発見する材料にさせていただけたらと思います。